

終戦から 1950 年代における籠山京の貧困児童の教育論

- 籠山京の貧困研究 (1) -

長野県短期大学 尾島 豊 (会員番号 001614)

キーワード：籠山京、貧困研究、貧困児童の教育

1. 研究目的

籠山京 (1910 - 1990) は 1954 ~ 1955 年にかけて北海道の 5 つの町 (都市 1、漁村 2、農村 2) の小・中学校で被保護世帯の生徒と一般世帯の生徒を比較する調査を実施して、その結果を考察するなかで次のように述べている。

「被保護世帯の子どもの成績は悪い。しかも注目すべきは、職員層や船主の子供の成績が、学年が進むにつれてだんだん上がってゆく時に、逆にだんだん悪くなってゆくことである。... (中略) ... しかも前述した身長・体重・胸囲の発育でも、同じように年齢が進むに伴って差が生じている。被保護世帯の子どもらの生活と教育は、彼らの発達を止めてしまうばかりか、かえって低下させている。そして中学三年生で、社会へ送り出すときには体の虚弱な能力の劣った者として出すのである。両親と小・中学校の教師がわざと、虐待をしているようにさえ見える。しかし、もちろんそんなことがあるはずはない。生活の困窮が育つべき子どもの心身をむしばんでるのである」(注 1)

本研究では、1950 年代という高度経済成長前の時期に籠山が行った貧困児童に関する調査研究に焦点をあて、その社会福祉の研究史上の意義を明らかにすることが目的である。

2. 研究の視点および方法

戦前から戦後にかけて、生活構造論、貧困研究を中心に社会政策や社会福祉の理論と実践に大きな実績を残した籠山は、戦時中に『国民生活の構造』(1943)で、エネルギー代謝という人間の生理的な再生産モデルを基礎に生活の構造的な分析を試みた。戦後は、戦後直後から始めた生活保護受給者調査を長期間継続して、その調査結果を基礎とした貧困研究、最低生活費の業績を残している。そして高度経済成長期には、新しく登場した老人問題へ言及し、また医療保障制度に関する批判と現実的な解決案も積極的に提示している。このように、籠山は貧困研究の分析視角から社会福祉問題への幅広い業績を残している。

籠山の社会政策論、社会保障論及び社会福祉論は、戦前から戦後の高度経済成長期に展開した労働運動や社会政策論のなかで一般に「左派」と呼ばれる立場に括られる。しかし籠山にとっては資本主義経済の分析視角は問題を見出して解決を探る手段でしかない。また籠山は戦後、中鉢正美とともに生活構造論の業績に大きな貢献を果たしたが、エンゲル法則の停止と履歴効果を発表した後の歩みは、生活学の体系を探索した中鉢とは異なる。

また江口英一とともに、低所得層の生活構造に着目して社会階層論を展開したが、最後まで貧困研究を続けた江口と異なり、貧困研究の分析視角を土台にしながらも、その時々登場する生活問題にどんどん切り込んでいった。

吉田久一は、籠山の究方法の特徴を、人間を社会科学的に診る「臨床性」であると表現する。(注2) 籠山の研究は、理論体系を求めるところがない。その特色は現実性と合理性にあると考える。現実には即し過ぎるともいえる籠山の提言は、社会的な制約を前提としつつも、その前提を明らかにして、身も蓋もなく普通の言葉にしてしまう合理性がある。

晩年の籠山は社会福祉活動を歴史的に検証し、ソーシャル・ニーズを発見して問題解決に向かうボランティア・アクションに求めている点は、現代的にみても興味深い。研究全体は、籠山による研究における「臨床性」「合理性」を念頭におきながら、戦前から終戦時、高度成長時、その後の籠山の業績をたどり、そのなかで貧困・生活研究がどういう経過で展開したかを明らかにする。そして最終的な問題意識は籠山が最後にボランティア・アクションに注目したことの意義を考えることにある。そのために時代との関連で籠山の調査研究の経過を明らかにする必要がある。

籠山の研究の時期区分は籠山自身の経歴を基本にして、1) 戦前 - 1935 (昭和 10) ~ 1945 (昭和 20) 年、2) 中央労働学園時代 1946 (昭和 21) ~ 1951 (昭和 26) 年、3) 北海道大学時代 (1952 (昭和 27) ~ 1959 (昭和 34) 年、1960 (昭和 35) ~ 1968 (昭和 43) 年)、4) 上智大学時代 1969 (昭和 44) ~ 1981 (昭和 56) 年とまとめることができるが、今回の児童教育論は主に3)の北海道大学時代の時期にあたる。

今回の研究では、戦前の生理学的な知見を基礎にした労働実態に関する諸調査研究と生活構造論が、戦後の貧困研究にどのように結びつき、その貧困研究が様々な福祉問題にどう継承されたかをという文脈で、主に高度経済成長期以前の1950年代に籠山が実施した貧困時の教育問題に焦点をあてる。高度成長期以後の、老人福祉や医療保険、そして社会福祉におけるボランティア・アクション論といった籠山の広い範囲にわたる問題意識・分析の視角の原点が、この時期の貧困児童の教育研究にあると思われるからでもある。

3. 倫理的配慮

本研究は、多数の一次史料等を収録した文献・資料を素材とする文献研究手法による歴史研究である。したがって、文献・資料等の引用にあたっては、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守するものである。

4. 研究結果

籠山の貧困研究からの児童の教育論への分析が、当時の実態を、理論とイデオロギーから比較的自由に冷静にとらえたこと、その分析が現代においても古くて新しい貧困と福祉問題を考える際に示唆的であることを示す。